

小説『ピエレット』の成立

柏 木 隆 雄

アンリ・ゴダン Henri Godin によれば、モイズ・ル・ヤウアン Moïse Le Yaouanc は、1953年に開かれた、ある国際学会において、「私のみるところ、『ピエレット』 *Pierrette* は、あまりに知られなさすぎます」と述べたと言う¹。この発言は、バルザックの文学とブルターニュ地方との関わりを考える際、問題とされたものようであるが、小説『ピエレット』が、あまり世評にのぼらぬ事情は、以後も変らぬようだ。プレイアド新版の『ピエレット』の校註者、ジャン・ルイ・トリテル Jean-Louis Tritten も、その解説を次のように書き出している²。

文学作品の中には、その良さが、なまなかの大衆には知られずに、華々しい人気を得られぬものがある。具眼の士は評価し、もちあげてもみせる。しかし、とんと読まれぬのである。小説『ピエレット』もそうした類いの作品である。

『地方生活情景』 *Scènes de la vie de province* 第三景、『ウジェニ・グランデ』 *Eugénie Grandet* に続く『ピエレット』は、たしかに前景『ウジェニ・グランデ』の名声に隠れて、バルザックの作品の中でも地味な光を放っている小説である。けれども、その小説の成立の時期1839年は、小説家バルザックにとって、「文学的活動のまことに旺んな年³」にあたり、また彼の公的生活も多忙を極める事件も起った。

『ピエレット』は、バルザックのこうした多産な文学活動の一所産であるが、滾々として尽きぬ如くの創作の秘密の一端を、この地味とされる中編小説を読むことによって窺うことはできないだろうか。

I

小説『ピエレット』は、作者自身も認めているように⁴、「憂鬱な」物語である。世渡りの下手な老祖父母の手から離れて、成り上りのブルジョワのいとこ姉弟の家に養われた孤児が、身内の無理解と無知と嫉妬に苛まれて、俗臭芬々たる自由派・王党派の田舎町の政争の嵐にもてあそばれた挙句、野の小さな花の萎れるように、はかなく死んでいく、というより殺されてしまう物語である。従姉の虐待と無関心から惹き起される悪性の脳腫瘍のため、無惨にも死んでしまったピエレットの遺体を挟んで、陰険狡猾な弁護士ヴィネが解剖を主張してせまるや、少女の恋人、ジャック・ブリゴーが、今迄の怒りを一気に爆発させる終章近く場面は、この小説の緊張が最も高まる、意味深い一齣である。

「ちょっと待ちたまえ、ブリゴー君。」

とオフレイ氏は、このブルトンの若者が^{のみ}鑿を振りかざすのを見て言った。

「オフレイさん」と、ブリゴーは傍らの死せる少女と同じくらい蒼ざめて答えた、

「オフレイさんのことですから、大抵おっしゃるとうりにします。でも、今度だけは、聞く耳持ちません……」

「お裁きなんだよ！」とオフレイ氏は言った。

「いったい裁きなんてものがあるのでしょうか？」とブルターニュ生れの若者は叫んだ、

「裁きとは、こうしてやることこそ、裁きなんです！」こう言いざま、彼は弁護士や外科医や執達吏に向って鑿を擬すると、鑿は太陽を反射してキラリと光った。(p. 159)⁵

ヒロイン、ピエレットの薄幸の、健気な生き様に胸打たれつつ、魯鈍、非情な小間物屋姉弟ログロンと、その影で彼等を使喚する野心家ヴィネ達に、いつ鉄槌が下るかと待ち望んでいた読者は、ここに至ってやっと溜飲を下げることができる。けれども、*doigt de Dieu* いわゆる「神の御手」は、必ずしもここで示されるわけではない。ブリゴーの鑿に脅かされて遺体にメスを入れることを断念したヴィネ一派は、一見、ブリゴー達の「正義」に屈した形となる。しかし実はそのことも自派に有利に事態を運ばせようとするヴィネの遠謀からなる行動であった。加害者ログロン姉弟は告訴を免れて傷つかず、知恵袋ヴィネの思惑通りに、地方の名流に列して、ヴィネとその肝煎りで弟が娶った女の食いものにされながらも、とにかく身を全うすることになるのである。一方、ピエレットを愛した人々はどうか。祖母ロラン夫人は悲しみのうちに死に、恋人ブリゴーは、指物師の職を捨て死地を求めて兵を志願する。彼は各地に転戦して虎口に飛び込む勇を敢て成すが、不思議にもなお死に場所を得られない。そして沈痛寡黙の表情に、癒されぬ心の傷を窺かせるのである。ヴィネ達が隆昌の極みを見せるにつけ、プロヴァンの町は、かつて小さな田舎町の自由派、王党派の双方を震撼させたピエレットにまつわる事件を思い出すものは、ほとんどない。あったとしても真実に遠い伝説として風化していく。

素朴なブルターニュのセレナードを背景とした幼い少年少女の淳朴なめぐりあいから始まる『ピエレット』は、かくの如くやりきれぬ思いを残して幕を閉じるのである。

はたしてこれが、作者バルザックがハンスカ夫人に宛てて、「いささか少女風の」作品⁶で「貴女にも多分御満足いただける」と⁷ 予告していたものののだろうか。1839年6月4日の書簡で、バルザックは、幼い少女を主人公とする小説の目論見を報告し、その作品がハンスカ夫人の娘アンナに捧げるものであることを言明している。アンナは1828年生れて当時11才、従って彼女に献ずるという小説のテーマが、同じ＜少女＞であることは当然でもあろうが、同じ年頃の少女に与えるにしては、あまりに夢のない、陰惨な物語ではないか。むしろバルザックが当初考えていたテーマは、彼の手紙に言う「アンナに読んで貰えるような可愛い味わいのある物語」⁸、清純小説の如きものではなかっただろうか。しかもそれは、単に幼い少女というのではなく、寄る辺ない、薄幸の孤児という、ロマンチックかつセンチメンタルな額縁が用意してあったことであろう。この「可愛い味わいのある物語」が、『人間喜劇』の諸作品の中でも最も陰惨なものの一つ⁹へと変貌するのは、まことに興味深い問題であるが、それは後に検討

することにして、先ず「みなし子」のテーマについて考えてみよう。というのもピエール・シトロン Pierre Citron が、「『ピエレット』の第一番目の核は、独り身の商人の家に孤児が到着することである」として、この小説の起源を、1838年1月雑誌「ル・マガゼン・ピトレスク」*le Magasin Pittoresque* に掲載された『ピエールの旦那』*Monsieur Pierre* という筆者不明の小説の中に見出しているからである¹⁰。シトロンが紹介しているその冒頭の部分を以下に引いてみる。

ピエール・ルヴィエールは、五才になるやならずで、日をおかずに父と母とを失った。ツッロ^{しやうけつ}ンで^{しやうけつ}狼^{しやうけつ}を極めたチフスに倒れたのである。哀れにも子供はたつきに窮した。両親が破産の憂き目にあって持ち物すべて失ってしまった矢先だったのである。

さてどうしようということになったが、幸いにもこの子に一人伯父がいると思い出したものがある。聞けばパリで大金持だという。おまけにピエールの名付け親でもあるのだ。そこでその子を引き取るのを承知かと問い合わせることになったが、なまじ断わられたり、返事が来なかったりしたら面倒だと言うのも出て、手っ取り早くピエールを乗合馬車に放り込んで、父母の死亡証書を荷札代りに、伯父の金物屋まで届けてしまった。幸せにね、と挨拶されたり口づけされたりしたこの孤児のお荷物は、それでも幸せなことに赤貧の状態を知らずにしまった。

やがて、託された御者のお蔭で、大した事故もなく少年は伯父の家に到着した。

シトロンは、更に数行引用したあと、この書き出しとピエレットの到着の有様を並べてみると驚くほど似ているので、単なる偶然の一致とは思われぬと言う。成程、シトロンの言うように、ピエールを娘の名に転ずれば、ピエレットになるし、彼女の父親は一歳の時、母親は5歳の時に死んでいる孤児である。祖父母のもとに引き取られるが、商売下手で破産したため、少女はいとこのログロン姉弟の屋敷にやられることになる。ログロンがパリに小間物の店を構えている時、ピエレットを預かってほしいという手紙が送られるのである。さらにシトロンは、荷物同然の形で子供が送られてくると、新しい養い親が、新調の服を作ってやることなどを、その共通した点としてあげている。子供を受け入れるのが近親で、それぞれパリの成功した商人であり、また独り身の中年者であることも重要な類似であろう。これらのことからシトロンは「バルザックが『ピエールの旦那』を読んだことは十分ある」と推測するのである。

たしかに上にあげた幾つかの例は、シトロンの博搜の努力に報いているように思われる。彼はこの『ピエレット』における孤児のテーマの重要性を他の場所でも次のように強調している。

さらに大事なことは、ピエレットが登場するや、はっきりと、以後バルザックが繰り返して用いることになる人物像が生れ出ることになったことである。すなわち他人の家に寄寓する孤児である。パキナが登場する『農民』*Paysans* の第一稿が書かれた1838年と考えることもできようが、これは断片であって確としたものでない。おそらく孤児の創造はピ

エレットを待って生れたものであろう。以後ユルシュル・ミルゥエとか『ラ・ラブィユー
ズ』*La Rabouilleuse* のフロル・ブラジエという形をとる¹¹。

シトロンの説は先に引いた論文とほぼ同じ頃に書かれたものであるから、あるいは、孤児ピエールの発見の意義が考慮された余波を引いたものであるかも知れない。しかしピエールとピエレットの類似は、あくまで冒頭の状況の類似にすぎないのではないか。その状況は必ずしも強烈な個性・特徴を持つものではない。さらに言えば、近親あるいは他人の家に寄寓するみなし子の物語がバルザックの作品において登場するのは、はたして『ピエレット』から始まるだろうか。

II

まさかシトロンの見出した『ピエールの旦那』の紛本とまでいうつもりはないが、伯父の家に父が破産して孤児になったため送られてくるという例は、既に『ウジェニイ・グランデ』のシャルルにおいて見られるではないか。もちろん年端も行かぬ幼児というわけではないが、シャルルは、母を早く失い、パリで手広く商いをしていた父親の破産のため、伯父グランデの家に送り込まれた孤児である。パリから地方へと方向こそ違うが、シャルルはピエールの先駆である。というより、1838年1月に世に出た『ピエールの旦那』という、あまり評判にもならず、誰が書いたかも知れぬ小説よりも、バルザック自身の、それも大当たりをとった小説の中に、類似のシチュエーションが見出されることの方がより重大な意味をもつのではないか。しかも注目すべきことは、1834年初版の『ウジェニイ・グランデ』は、この『ピエレット』が執筆されたとされるほぼ同じ頃、1839年11月にシャルパンチェ Gharpentier から再版されているのである。彼の作品が再版されるのはもちろん『ウジェニイ・グランデ』だけではない。けれどもこのシャルパンチェの版は、或る意味で特別な場合に属する。この版に際してバルザックは、「マリアに」という献辞を初めてその巻首に付して単行本の体裁で出版しているのである。この献辞の持つ意味については既に他の場所で説いたのでそれに譲るが¹²、少なくとも出版社が印刷・刊行するのをなおざりに、まかせきりにしていたわけではない。加筆・修正の筆は、例によって細やかであるから、十分注意を払って読み直しているはずである。それは発売の期日11月9日から考慮して、その年の9月から10月にかけてのことであろう¹³。ちょうど『ピエレット』の構想の固まる頃に一致する。当然『ウジェニイ・グランデ』の構図が改めて作者の頭に浮び、さらにそこから新しい別の構図が連想されたのではないか。そうした眼で『ピエレット』を見てみると、バルザックの旺んな創作活動を支えた技法の一つ、アンチ・テーゼの活用

『ウジェニイ・グランデ』のシャルルは、父に勧められて、パリからソオミュール Saumur の伯父の家にやってくる。知らされてはいなかったが、彼が到着した時には、既に全くの孤児であり、家はすっかり破産しているのである。伯父は、文無しの青年を厄介者扱いして、てい

よく「身を立てる」ことを説いて新大陸へ追いやってしまうものの、青年は、素朴純情な従姉の愛情こもったもてなしを受ける… こうしたシチュエーションを裏返しにしてみると『ピエレット』の構図になりはしないか。

シャルルという軽薄な伊達者の孤児に対して、ピエレットという十代はじめの田舎育ちの純朴な少女を登場させ、シャルルを迎える親切で美しい乙女ウジェーニイに代えて、冷たく醜い老嬢シルヴィが配される。シャルルからピエレットへのアンチ・テーゼの構図を、もう少し詳しく検討してみよう。

シャルルとピエレット、それぞれの到着が物語の展開の上で重要な契機となることが、まず注目される。シャルルもピエレットも、前触れなしに不意に駅馬車でやってくるのである。シャルルの仰々しい登場の仕方と、ピエレットのみすぼらしいそれは、次の文を見較べれば、その対照がはっきりする。

やっとのことでデ・グラサン氏が覗き得たのは、一人の若者の姿で、彼は駅馬車の馭者を従え、とてつもなく大きなトランク二つと幾つもの旅行鞆を持たせていた¹⁴。

これが客達の好奇の眼に迎えられた、パリからの若者シャルル・グランデの門口に降り立った光景である。一方ピエレットは、あたかも郵便小包そのままに、馭者の腕にかかえられて、送り届けられる。

馭者は、ピエレットをログロン嬢のところへ連れて行ったが、その荷物は、ドレス二着、靴下二足、下着二着にすぎなかった。目指す家は驛の所長が教えてくれた。

「今日は、皆さん」と馭者は言った。お宅のいとこさんをお連れしましたよ。ほら、ここです。実際、この子は可愛いですな。47フラン、払ってもらいますぜ。このお嬢ちゃんにゃ何にも重いものはありませんがね、この書類にサインして下さいな」¹⁵

そして馭者とログロン姉妹の支払いをめぐるやりとりのあと作者は次のように記す。

これがピエレット・ロランの、いとこ姉弟の家に着し、迎えられた様子である。家の者はただ啞然として見ているばかりで、少女はさながら小包一個のごとく投げ込まれたのである¹⁶。

シャルルは、「少くとも 300 キロはあるぞ」と囁かれるくらいの荷物とともにくるのである。そのトランクの中味たるや、当世流行の衣装ぎっしりと、ほぼ二頁を費して縷縷数えあげられるが、とりわけ、その寝衣に至って女中ナノンのあげる感嘆の言葉と、ピエレットのそれを確かめるアネットの驚く声とが我々の興味を引く。

ナノンは、全く目のくらむばかりに驚いて絹の部屋着を見た。緑の地に金で花柄が刺繍してある古代模様をちらしたものである。

「お寝みになる時、これを着なさるの？」と彼女は言った。

「おや、まあ、きれいでございますよ、教会の祭壇の前に置いてあったらねえ。そうすると、可愛らしいお坊ちゃま。あげておしまいなさいまし、教会へ。それで魂が救われます。持ってちゃ、その魂をとられちゃいますよ。でも、まあ、なんて粹ですこと。そんな風に着なされるとねえ。ひとつお嬢さんにも言って拝ませてあげよう。」¹⁷

アデルは、自分のナイト・キャップの一つを、湯たんぽを持ってくるついでに持ってきた。ピエレットは、これまでブルターニュの粗い布地のシーツにくるまって寝ていたのを、木綿の織細で柔かなシーツに驚いてしまった。少女を部屋に入れて寝かせると、アデルは階段を降りてきたが、こらえきれずこう叫んだものだ。

「おやおや、なんて下着でしょうねえ。これじゃ、肌をこするばかりでしょうよ。やれやれ、どれもこれも役に立たないものばかり。」 こう言って。アデルはピエレットの荷物の包みを空けてしまった。¹⁹

roman feuilleton にまま多い孤児、捨て子のテーマが、その生い立ちにおいてたまたま暗合した場合でもありうるだろう。しかし、後に『地方生活情景』としてまとめる際、『ピエレット』を『ウジェニ・グランデ』の直後に配せしめた作者の意を忖度してみると、むしろ『ウジェニ・グランデ』のシチュエーションのアンチ・テーゼとして、ピエレットという主人公が考え出されたとする方が、バルザックの『人間喜劇』の構想に嵌るのではなかろうか。そして少なくとも、その『ピエレット』の案が作者の頭に形をとった最初は、はじめに述べたように、決して現在の憂鬱な結末に向うものではなかったはずである。ピエレットという孤児の造形の原形について一つの仮説を提出したあとで、以下にその変貌の軌跡を追ってみることにしよう。

III

ブレイアド新版の校註者、トリテルは、この「甘美な物語」の構想が、陰鬱な政治性を帯びた小説へと変化した原因にも触れて、「最も単純な答は、バルザックがオプティミストでなく、人間の善意を信じていない、ということであろうが」としながら、1839年6月から10月までの間に「彼の身边に起ったさまざまな事件が、憎しみ、そしてそれに由来する犯罪が人間社会の根本にあるということを思い知らせたからだ」と述べている。²² トリテルの言う「身边に起った事件」とは、すなわち、いわゆる「ペイテル事件」L’Affaire Peytel と呼ばれるものである。

1839年8月1日の夜、ベレイ Belley の公証人、セバスチャン・ブノワ・ペイテル Sébastien Benoit Peytel が、町から数キロ離れたところで妻と下僕とを殺害したとされる「ペイテル事件」は、バルザックが犯人ペイテルを弁護して、新聞「世紀」*le Siècle* 誌上に『ベレイの公証人ペイテル裁判に関する書翰』*Lettre sur le Procès de Peytel* (以下『書翰』と略記する) を公けにして、俄然、バルザックの「カラス事件」として世の注目を浴びるにいたったものである。²³ バルザックは、「世紀」誌の1839年9月27・28・29日にわたって掲載させた『書翰』の中で、ペイテルが妻をその財産目当てに殺害する必要など無かったことを、細かく数字を挙げて論証し、裁判に関わる人々の正義を訴えた。しかし結果は、「二ヶ月もの間、その責苦から解き放たれようと、前代未聞の努力をした挙句、ペイテルは二日前に、断頭台に登りました。基督教徒として死んだと、これは教誨僧の言葉です」とハンスカ夫人に報告している通りとなったのである。²⁴ バルザックは、同じ手紙に続けて「私は男として、彼は無実だったときっぱり申します。この手紙の痛恨の思い、お察し下さい」とつけ加えている。彼は9月7日の夕方、友人ガヴァルニ Gavarni ——彼もペイテルの友人であった—— とパリを発ち、10日には、事件のあったアンデール橋を実地に見、さらにベレイの町を訪れたが、地方の人々の、新参者や他郷人にたいする冷やかな、嫉妬さえまじる陰湿な雰囲気、事件を自ら調査するうち、肌に痛切に感じとったようだ。

バルザックがペイテル弁護の筆を執ったこの『書翰』の幾つかの論調が、『ピエレット』のある部分に酷似していることに、トリテルは注目している。彼は次のようにその類似の例を指摘

する。

もし今、『書翰』の文を詳細に検討してみるならば、この弁論書から小説へ流れこんだとおぼしき相当数の用語が見出される。たとえば、「これは不幸な事件の一つだ。人はただ両の眼と両の手を天に向かって挙げることしかできない。そしてイエスの如く、『主よ、彼等を赦したまえ、あの者達の裁きの席は、天上にあります』と言うのである。」「(『書翰』)という文と「ピエレットは〔中略〕その時に至っても、集った近親に嘆願して、どうぞ、いとこ姉弟を赦してやって欲しい、自分も赦しているのだからと言い、さらに、感嘆すべき意識の明瞭さを示して、この世の物事の審判は神様だけにあるのですと付け加えた」²⁵

こうして、トリテルは、「ペイテル事件」のバルザックに及ぼした影響の深さを要約して次のように述べる。

バルザックの気持としては、ペイテルの裁判がねじ曲げられるのも、ログロンのそれが、彼の有利な方向に転回するのと全く同じ理由によることになる。私の利害が政治と結託して、無辜の人間を処刑したのだ。町中の者が示し合せて、無意識にか意識してかは知らぬが、町の習俗に身を屈せぬような跳ね上りの輩を排除しにかかるのだ。

冒頭に引いたブリゴーのやりきれない怒りを爆発させる一場面は、作者バルザックの気持を代弁するものであり、『ピエレット』の重要なモチーフの一つを示していることが理解できるであろう。

けれども、裁判の不公正に対する不満の念、弾劾の気概のみが、『ピエレット』創造の因をなしたとするのは、なお単純に過ぎるであろう。なるほど、それは、執筆の動機となったとは想像できる。しかし、孤児を主題とする最初の構図の上に、『ペイテル事件』が落した影は、単なるイデーの付与以上に、小説の細かな筋立てや登場人物の新たな創造にも、大きくかぶさったように思えるのである。その具体的な例として我々はヴィネという作中人物をあげることができる。

ヴィネは、『ピエレット』の中で、最も特異な人物であり、作者自身、作中で示すように、ピエレットのやがて運命を左右する役割を負うべく登場してくる。ヴィネという人物像の面白さは、ちょうど、ほんの端役として舞台に現われた役者が、肝腎の主役である悲劇のヒロインを、劇の途中からすっかり食ってしまうおもむきのあることである。つまり、それほどヴィネという性格は、陰險狡猾の点で迫力を持って活写されているのだ。

このヴィネの創造はどこから来たものであろうか。『ピエレット』におけるヴィネの描写を辿っていくと、そこに一つの推論が生れてくる。ヴィネ弁護士のプロフィールに、ペレイの公証人ペイテルが写されているのではないだろうか。もちろんペイテルは、バルザックがその人物の「本質的に善良」なことを信じて、必死で弁護の筆を振った友人であって、決して『ピエレット』で暗躍する悪徳弁護士モデルとするはずはない。けれども職業こそ弁護士と公証人と違っているものの、いわゆる「黒衣の階級」に属する人間であり、裁判の告訴状や、バルザッ

クの『ペイテル裁判に関する書翰』に風聞として引かれたペイテル像は、小説中のヴィネに通ずる多くのものを持っているのである。

ヴィネは貴族ではない。下層平民の出身で常に野心に燃えた男である。出世の手蔓に名流の子女を誘惑して娶るが、その強引なやり方に、かえって女の家族から締め出しを喰ってしまう。プロヴァンの町での彼は、人気のない貧乏で不遇をかこつ弁護士である。

世間の者からはつまはじきされ、満腔の憎悪を妻の実家の人々に対しても、地位を与えてくれぬ政府に対しても、自分を受けいれようとせぬプロヴァンの社交界に対してもおぼえたが、ヴィネはその惨めな境遇を甘んじて受け入れた。²⁶

ペイテルもまたベレイの町で孤独であった。彼は植民地生れでパリに住んでいた娘と結婚して、ベレイで生活を始めるが、町の人には他国者としてそっぽを向かれたらしい。バルザックはその『書翰』にペイテルのパリを出てからの経歴を書いているので、それを引いてみよう。

ペイテルは、公証人として身を立てるべくパリを去った。マコン Macon にやってきたが、無能力、即ち、書記としての経験不足と知識の不足を理由に拒絶されてしまった。〔中略〕ペイテルは、それほどの仕打ちに職をあきらめることなく、リヨンに赴いた。そこで筆頭書記となって、やがてベレイの事件も扱うに至ったのである。成程、不誠実であるとか、誰その金を使い込んだとか批難されるような男なら、いろいろ厄介なことがらにぶつかったことだろう。しかし彼はそんなことはなんら経験しなかった。彼は歓迎されたのである。²⁷

そして事件の起る一年前の1838年初頭にベレイで法律事務所を買い取って公証人としての仕事を始めたのだった。こういうペイテルの経歴と対人関係は、先に示したヴィネのそれと重なり合うものがある。そのうえ、ペイテルの若き日の野心のあらわれとしてのジャーナリストの一面も、ヴィネにうかがうことができる。

今のところ、ヴィネは、プロヴァンに新聞を起して自分の武器にしようと思っていた。¹⁸

そして彼は実際愚鈍なログロンを、グロー大佐と共謀して味方に引き込むことに成功すると、王党派に対して鋭い筆を振り始めるのだ。

この三人（ヴィネ、大佐、ログロン）が連れ立って歩くと、その団結の様が必ず町にひと議論わかつたのだった。この三巨頭は、郡長や裁判所長の周辺、つまりティファヌー派にはおぞけをふるわせたが、プロヴァンの自由派達の自慢の種の護民官達であった。ヴィネは『通信』 *le Courrier* 紙を自分ひとりで編集し、記事を書いた。彼は一派の領袖であった。²⁹

バルザックが五才年下の友人ペイテルの弁護を引き受けるにいたったのは、ペイテルがジャーナリズムに身を投じて名を挙げようと、1831年『妖精』 *le Sylphe* という小新聞の編集に携

わっている時に知り合った因縁からである。ペイテルは、同じ1831年にジラルダン Girardin の持株の幾つかを譲ってもらって『梁上君子』 *le Voleur* なる新聞の共同経営者ともなっている。ここで興味深いことは、このペイテルが筆禍事件を起していることだ。彼は1832年に、『梨の生理学』 *La Physiologie de la poire* というパンフレットの戯文をものして「阿呆梨」と仇名されたルイ・フィリップ王を揶揄攻撃し、ために1833年7月都落ちせねばならぬ羽目におちいったのである。

ヴィネの主幹する『通信』紙が、激越な自由派で、ルイ・フィリップ党の強力な後押し記事を書きまくることがすぐ思い出されるであろう。ヴィネはその功によって勢力を得、代議士に選任されて、中央の議会においても権勢をふるうに至るのである。

このペイテルの実際経験したジャーナリズムにおける浮沈と全く正反対であるヴィネの出世譚は、小説『ピエレット』成立の鍵の一つを我々に提出している。バルザックは、殺人事件の公判の論告にあらわれた「野心家で貪欲な、いっこうに町の人々の信頼を得ぬペイテル」を、小説の上でヴィネという人物に結実させたのではないか。つまりバルザックは、自分自身ベレイの町の雰囲気に触れ、起訴状や裁判審理の経過を知るにつけて、おのずと浮びあがってくる「公証人ペイテル」にたとえその人物像が、彼の信ずるペイテルとは裏腹な虚像であったとしても、小説家バルザックとして、強い魅力を見出したのかも知れない。いっそ町の連中が作りあげた「悪逆な公証人」を逆手にとって、己が小説の中で動かしてみようと食指が動いたのではないか。そしてそれは同時に、彼の公判に関する弁護論の『書翰』以上に、ベレイの町の人々、ペイテルの敵達に対して挑戦状とも成り得るはずである。ヴィネの隆昌の物語は、そういう意味で痛烈な皮肉に満ち充ちているし、作者が十分そのことを承知していたことは、彼の筆致からも知れる。

IV

ところで「ペイテル事件」がこの小説の成立に及ぼしたと思われる影響はヴィネの創造ばかりではない。『ピエレット』の物語を悲惨なものにする原因の一つは、シルヴィの見当はずれの嫉妬にある。ピエレットは、幼児性の抜けきれぬ無垢な少女であるが、幼な友達の指物職の徒弟ブリゴアを愛している。ブリゴアもまた兄のような愛を抱いて、虐げられるピエレットを、遠く近く、間断なく見守っている。『ポールとヴィルジニイ』 *Paul et Virginie* を写したような二人は、シルヴィの猜疑に満ちた眼や町の人々の手前、大びらに声を交すことはできない。深夜、町が寝静まるのを待って、ブリゴアがピエレットの部屋に面する道路に佇み、わずかに言葉を交すのである。それを一度シルヴィに見咎められると、ちょうど『パルムの僧院』 *La Chartreuse de Palme* のクレリアとファブリスのように³⁰、パンの中に手紙を仕込んで、それを糸に吊して道路と部屋と往復させようとするのである。

老嬢シルヴィは、ボナパルト派の退役大佐、ヴィネの盟友でもあるグローと結婚する腹づもりでいた。ピエレットとブリゴアの深夜の逢いびきを測らずも目にしたシルヴィは、少女の恋

の相手は大佐と思い込んでしまうのである。以来、この醜く、残忍で気のきかぬ老嬢は、おそろしい嫉妬と猜疑心にとり憑かれてしまう。バルザックは、シルヴィの嫉妬について以下のような分析をする。

嫉妬の念がこの心に僧房生活に見られる激しさで入り込んでしまったのだ。嫉妬というものは、とてつもなく何事も信じ込み、またすぐ疑ぐり深くなる情念で、そこでは、気まぐれな妄想が最も立ち働くのである。しかも精神をきりりとさせるどころか、上の空にしてしまうものだ。で、シルヴィにあっては、この情念は、さまざまのあらぬ考えへと当然向って行ったのだった。³¹

バルザックの嫉妬という、厄介な情念に関する洞察はシルヴィの思考と行動の原理に説得力を与えるものである。この老嬢のピエレットとその相手の男に対する漠然とした、しかも根深い嫉妬の構図は、実は、「ペイテル事件」の一つの真相にかかわりあうものではなかっただろうか。

ペイテルの事件直後の陳述によれば、マコンからベレイへの帰途、やがて町まで数キロメートルという地点で、突然、馬車に同乗していた下僕に、夫妻ともども銃撃され、妻は瀕死の重傷を負わされた。今度は逆にペイテルがハンマーで下僕をやっと殴打して死に至らしめたというのである。救助を求めて近くの医師を起したが妻は虚しく世を去った。この陳述は、曖昧な点多すぎて、裁判所はこれを信ぜず、かえってペイテルは、妻と下僕殺し（胎内に子供が宿っていたことが余計ペイテルに対する心証を害した）で起訴されたのである。ところでバルザックの『書翰』において、検事側の論告とそれをめぐる弁護側の証言等から浮びあがったペイテル及び妻の関係を、バルザックは、一つの筋道の立った事実として読者の判断を要請している。少し引用が長くなるが、以下に示してみる。

フェリシイ・アルカザル Félicie Alcasar は若い植民地生れの娘で、植民地で育った白人に特有な情念の持主で、我儘としつけの無さ、裏表のある性格にいたっては言を絶するものがあつた。見かけからすれば、とても男心を誘う女に生れついていなかったが、そのため、分に合った相手を選んで情念を満足させようとした。そこで知ったのがルイ・レイ Louis Rey という軍人あがりで両親のない美男の青年である。知りあつたのは姉の夫モンリシャル Monrichard 氏の屋敷であつた。不運なペイテルがそこに登場することになる。〔中略〕運命を定めるペイテルとその少女の結婚がとり行われた。けれどもペイテルは、やがてとりわけ憂鬱な予感に悩むようになる。今、こんなにも内気でこんなにもはにかんでいるこの少女がいろいろの口実を設けて、自分も同じようなものを作るからと彼女に都合のよいような遺言状を作らせるのではないか。それもみな、ルイ・レイの指し金で。

〔中略〕ルイ・レイは、ペイテルとその妻がリヨンに行くことと知って、その町へ先廻りし、途中で行き合うようにした。ペイテルは義兄の召使いを認めて、主人夫婦もリヨンに来ているのかと尋ねた。答えは暇を貰ったのだということだった。ペイテル夫人は夫に嘆願し

てルイ・レイを雇ってくれとねだった。ペイテルは、この召使いを得た妻の喜びようが激しいので、まだ成年に達していない娘に悪意などあらうとは到底思えず、折れることにした。この点で言うことを聞いてやれば、家庭の平和が得られるだろうと期待したのだ³²。

この文は、ペイテルの若妻と下僕の不義の事実があったことを匂わせ、しかも、ペイテルは、初めその事を全く知らずに結婚したものの、やがて気づかずにはいないで妻と下僕の行動に疑いの眼を向けることが、以下の文に続けられている。

『ピエレット』を読んだ眼で、上のバルザックの文を読めば、両者に似通う、幾つかの状況を認めることができるだろう。そこには、若い妻と、軍隊上りの青年との間の関係を疑って嫉妬する、年の離れた夫³³の姿が浮んでくる。そして、その姿は、表面は猫撫で声を出しながら、ひそかに、ピエレットとグロー大佐を、或いは、グロー大佐と信じて、若者ブリゴーとの会話を窺い、聞き耳を立てる老嬢シルヴィと重なる。実際、この謎の多い殺人事件は、ペイテルが、密会して甘い言葉を交している自分の妻と下僕の現場をおさえて、怒りにまかせた夫が、下僕を撃ち、その弾がそれで妻に当り、逃げるルイ・レイを今度はハンマーで打ち据えたというのが真相のようだ。このことも、手紙を仕込んだパンの糸を手繰り上げるピエレットの不意を襲うシルヴィを想わせる。

けれども、バルザックが『ピエレット』において書きたかったことは、実は、シルヴィの暗い、残忍な嫉妬である以上に、恋人ブリゴーとの秘密と名誉を守ろうとするピエレットの健気で美しく、壮絶な、死を賭した勇気であっただろう。ここにもペイテルの影が尾を引いている。ペイテルは、下僕のレイが妻を襲い、そのため自分がレイを殺したのだと頑強に言い合った。彼の真意は、妻と召使いの間にある醜関係を明るみに出さず、ひたすら妻と、そして自らの名誉を守ることにあった。そのことに、いわば生命を賭けたのである。バルザックが痛恨の思いをこめてハンスカ夫人に書き送っている言葉は、彼の「ペイテル事件」の感動がどこにあったかを語っている。

人生には、致命的となるさまざまな事柄があるものです。ああ、情況は、いくらかも有利に運べるものがありましたのに、遺憾ながら、それを証明することができなかったのです。人々が決して信じようとしないうる気高い行為というものがあります。いずれにしても、すべては終わりました。〔中略〕ペイテルは、自分の名誉に殉じたのです³⁴

バルデッシュ M. Bardèche も「ペイテルが誠実に釈明するのを拒絶したことが、彼の死命を決した」と説いているが³⁵、この命と名誉をかけた沈黙の重さは、ピエレットのそれと等しい。

「さあ、つかまえたぞ」と叫んで老嬢は窓のところへ走ると、ブリゴーが一目散に逃げるのが目に入った。

「お寄こし、その手紙を」

「いやです。」とピエレットは言った。

青春のあの測り知れぬ一種の靈感に奮い立ち、魂も据わって、崇高な抵抗の精神そのままにきっと向い立った。絶望に押しひしがれた幾つかの民族の歴史の中に我々が天晴れとうち仰ぐ姿のそれであった。

「ああ、成程、嫌だと言うんだね？」こう叫ぶとシルヴィは、いとこの方にずかずかと進んで、おぞましい顔を突き出したが、それは憎悪に満ち、猛り狂って醜くゆがんでいた³⁶。

このあと、凄惨な手紙の争奪が老嬢と少女の間に展開されるが、シルヴィの浅間しい誤解が原因であると読者には判っているだけに、残酷さは、この上ないものになる。

ペイテルの人となり、根は善良でありながら、若妻に対して異常に嫉妬深く、また感情がすぐ激発して、しばしば乱暴な行為に及んだことは、バルザックの『書翰』にも明らかにされているし、諸家の研究にも説かれている³⁷。バルザックは、おそらく事件の真相を知っていたのである。先に引いたハンスカ夫人宛の手紙には、彼の沈黙に対する焦立たしさをも見せている。しかし同時に彼はペイテルの沈黙の意味も深く理解し、彼なりに心打たれるものがあつたのであろう。彼の公判に寄せる『書翰』は、注意深く直接的な表現を避けてはいる。バルザックの真情は、健気にブリゴーとの秘密を身を犠牲にしても守ろうとする少女ピエレットの中に生きていると言えるのだ。

V

Ⅲ、Ⅳに詳しく説いたように、『ピエレット』の構図の中には、「ペイテル事件」の影が、大きくさしている。さらに細かい例を挙げるなら、血まみれになってフラピエ親方の所へかつぎ込まれたピエレットを診察するのはマルトネル Martener という名の医師であるが、ペイテルが事件当夜、瀕死の重傷を負った妻をかつぎ込んで救いを求めたという医者マルテル Martel であって、Martel と Martener の音の類似は単なる偶然ではなからう。またⅣに見たペイテルの妻とルイ・レイの関係も、ピエレットとブリゴーの関係に通ずるものがある。バルザックの言によれば、フェリシィは、植民地あがりのコケットな、無学で、躰のなっていない女性——ペイテルが会ったのは彼女がやっと20才になるかならぬ時だが、ルイとは、それ以前の少女時代である——であつたらしいが、ピエレットはといえば、一般と風俗を異にするブルターニュの娘であることが強調され、自然に伸び伸びと育つた子、悪く言えば、行儀作法おかまいなしに甘やかされた子供である。ルイ・レイが結婚したフェリシィを追ってリヨン迄行き、ついにベレイの町で下僕として一緒に住むようになることも、幼な馴染みのブリゴーが先に故郷を出たピエレットを追ってパリに出、プロヴァンの町に身を落ち着けて、恋人と同じ町に暮せる喜びをかみしめるのと通ずる。バルザックはこの二人の恋を『ポールとヴィルジニ』の如く、清純・無垢に描こうと、その点を強調した文章が目立つが、シルヴィや町の人からすれば、バルザックが事件に際してフェリシィやルイ・レイに感じたような、不埒な所業に違いない。『ピエレット』の結末に、彼女の死後数年して囁かれる町の噂が置かれるのは、そ

の機微を窺わせるものだろう。

いずれにしても、1839年9月初め以降、10月半ばまでの一ヶ月半のバルザックの書簡の殆どは、ペイテル事件に関わるもので、彼の関心が、いかにこの事件に深く占められていたかを示している。そして、その結果は「ありとあらゆる種類の中傷、批難が、私への骨折賃だったのです。もうこれからは、無実の人間一人殺されようと高見の見物ときめ込みましょう、スペイン人よろしく人が殺されかけたら、雲を霞と逃げ出すことに致しましょう³⁹」の辛辣な自嘲の言葉となるのである。彼は同じ手紙で「ここ数ヶ月は、とても執筆できる状態でなく、疲労困憊の有様です」と訴えたあと、やがて完成すべき作品として、『田舎の司祭』*le Curé de village*のほか二、三の名とともに、「貴女の大切なアンナに献げる」として『ピエレット』をあげている。アンナに献げることは、既に先便に触れてあるが、本当の意味で構想の出来あがったのは、この手紙を書く前後の頃であろう。11月2日付の手紙に、「『ピエレット』は憂鬱な趣きのある香しい花々の一つ」だと、はじめてその内容に触れる表現が見られるからである。この11月初めという時期は注目すべき意味を持っている。『ウジェニ・グランデ』の再刊は、既に述べたように11月9日なのである。そして校正、加筆の時期はおそらくその二ヶ月程前であろうと推測したが、それは、バルザックが「ペイテル事件」に奔走していた時期と重なるのである。

いささか想像をたくましくすることになるが、おそらく、その激しい二ヶ月の間、深くペイテルにかかわっていたバルザックの思考をたどれば、世情一般の口のにぼるペイテル像に対する反撥、親しくペイテルから事情を聴いた中に見る悲劇の真相と、彼の自滅をも潔しとする名誉心の発露へのバルザックなりの感動が、三つながらに、彼の脳裡に渦巻いたことであろう。そこから、ヴィネという性格の創造と、嫉妬に狂った人間のひき起す悲惨、一つの純真な魂が、その犠牲となる梓組が生れたのではないだろうか。この構図は、あたかも同じ頃校正、加筆を通じて意識にのぼっていた『ウジェニ・グランデ』に触発され、以前から抱いていた、おそらくはみなし子の少女を題材とする小説の構想と結びついたのである。

VI

小説『ピエレット』が、初め作者の予告した形から、数ヶ月も経ぬうちに、現在のメランコリイ溢れるテキストへと変貌する過程を、我々は、「ペイテル事件」を軸として考察してきたが、それでは、バルザックが、最初頭に描いていた物語、いわゆる『原・ピエレット』は如何なるものであったか、という点に関して二、三つけ加えておきたい。既に述べたとうり、主人公が作品を献呈すると約束したアンナの同情、共感に訴えるような、＜少女＞としてあったことは間違いない。おそらくは、薄幸に生れついた少女——アンナとほぼ同じ年頃の——が、孤児として他人の家にあずけられながら、やがて周囲の人々の善意と、彼女自身の善行によって幸福への道に至る、といった筋立が考えられていたのではなかろうか。とすれば、我々は、たちまち、『地方生活情景』の第一景、『ユルシュル・ミルゥエ』*Ursule Mirouët* を思い出さない

わけにはいかない。実際、ユルシュル・ミルゥエも、ピエレットと同じ14才で物語に登場するし、名付け親の屋敷に寄寓する孤児なのである。『ユルシュル・ミルゥエ』は、作者の姪ゾフィ・シルヴィル Sophie Surville に献げられているが、その献辞の冒頭に、「この本の主題から細かい点に至るまで、まだ世間というものを知らぬ一人の娘の承認——これがなかなか厄介な代物だが——を得た³⁹」と書いた、その「娘」とは、先に『ピエレット』を献げたアンナのこととされるから⁴⁰、あるいは、彼の書かんとした作品が『ユルシュル・ミルゥエ』の如きものであって、先に記した経緯から、それが現行の形に変わり、元来の構想は、やがて一年の後に新たに完成した、と見なすことも可能ではないか。地図を開けば、『ピエレット』の舞台となるプロヴァンスは、セーヌ河を挟んで、『ユルシュル・ミルゥエ』の舞台ヌムール Nemours と、モントロー Montereau の町を中心としておよそ 50km の対蹠点にある。そしてピエレットが幼年期を過すブルターニュのペン・オエル Pen-Hoël の地は、ケルガルゥエ家 la Famille Kergarouët の領地で、ユルシュル・ミルゥエの恋人、サヴィニアン・ド・ポルタンデュエール Savinien de Portenduère の母は、そのケルガルゥエの出であることを誇りにしている。ブルターニュにかかわる糸がはっきりとそこにつながっているのだ。さらによく注意してみると、二つの小説のヒロイン、ピエレットとユルシュルは、ただに年令が等しいばかりでない、両者の純粹、素朴な性質、カトリック的精神を強調している点に共通の特色がある。彼女達は愛の子であり、自然の子である。いま試みに彼女達をもっとも良く表わす箇所を幾つか拾ってみれば、素直で無邪気な少女らしさ、恋愛に関してきわめて初心で無知なこと、そして、一方は、シャプロン Chapron 神父に、他方はアベール Habert 司祭によって、厳格なカトリック教育をほどこされ、しかもそれを敬虔に受け入れるなど、ピエレットから、そのままユルシュルにうけつがれていることが少なくないのである。

ところで、この二人の孤児の、それぞれ近親に引き取られて育つ運命を比較してみると、大事な点に気がつく。つまり、ユルシュルの周囲には、老人達は何くれとなく、彼女の庇護者となるのに対して、逆にピエレットは、老祖母の手から離れて、中年の独身者姉弟の中に養われるのである。しかもユルシュル・ミルゥエを見まもる四人の老人は、既に他の場所で示した如く⁴¹、それぞれ、慎重・節制・堅忍・正義のいわゆる四美德 *quatre vertus cardinales* を体現し、彼女自らも、信仰、希望、愛の対神三美德 *trois vertus théologiques* を具備する如く描かれていた。ピエレットは、といえ、成程、彼女自身は、下に示す文に見るように、対神三美德を体している。

ピエレットはイエス・キリストを聖体拝受の儀式的の時に見て、娘達には天上の婚約者であると示された彼を愛した。彼の苦しみは、肉体的にも、精神的にも、あるひとつの意味を持っていたのだ。彼女は、すべてのものごとに「神の御手」が見られると教えられた。彼女の魂は、この屋敷で手ひどくも打擲されてなお身寄りの人間を批難できなかったが、やっと、不幸な人間の向う、かの天上の地へ対神三美德の翼をひろげて憩うのだった⁴²。

しかし、彼女の周囲の、いわゆる三種の「黒衣の人々」、すなわち、医師、僧侶、法曹は、

ユルシュルとは異なった形でかわるのである。ヴィネにしても、アベール師にしても、なるほどピエレットにはじめは接近するが、それぞれ別の政治的野心を秘めて近づくのであって、やがて離れて行き、むしろ敵対する。医師マルトネルは、確かに最後に至ってピエレットの病気を治すために大いに骨を折るが、その動機には、反ヴィネの政治力学が大きく作用しているのである。言ってみれば、ピエレットは、一人の人間の人生に最も意味を持ち影響力のある「三つの黒衣の階級」と無縁の存在として描かれている。ミノレ博士 Dr. Minoret や、シャブロン師、ボングラン判事 Bongrand の慈愛と保護の下に幸福を全うするユルシュルとの相異はそこにある。同じように音楽を愛し、神を敬い、純情を勇敢な青年に捧げて、しかも、近親の嫉妬と虐待のために、死の淵に追いつめられながら、ピエレットは死に、ユルシュルは癒えて幸せな生を送るのである。

バルザックは「ユルシュルはウジェニイ・グランデの幸福な従妹である」と言うが⁴³、この言葉をそのままに「ピエレットはユルシュル・ミルゥエの不幸な従妹である」と言うことができよう。そして実はこのバルザックの言葉がいみじくも示しているように、『地方生活情景』において、第一景『ユルシュル・ミルゥエ』、第二景『ウジェニイ・グランデ』、第三景『ピエレット』と配してあるのは、それぞれ、相通ずる性格の少女の名を題に冠して、その生涯を地方の欲望の渦の中に描く作品を、単に偶然に並べたのではなく、それらが綿密な計画の下に構築されていることを予想させるのである。

ウジェニイ・グランデは、そのマリア的性格において⁴⁴、ユルシュルからピエレットへつなぐ役割を果たすが、物語の最後に、自己の莫大な財産を周りの人間達から、虎視眈眈とつけねられる老嬢の運命をも暗示されている。一度ボンフォン Bonfons と結婚はするものの、事実の上において、彼女も独身をつらぬき通していることには変りはない。つまりウジェニイは、『ピエレット』におけるシルヴィ的な要素も持つに至ることになる。そしてその問題が、『ピエレット』の序文において、バルザックの具体的な筆を通して主張する独身者の社会的な罪、醜さとして、小説の中で展開されることになるのである。『ピエレット』に至って、『独身者達』 *les célibataires* と副題の添えられる『ピエレット』、『ツールの司祭』、『ラ・ラブイユーズ』の三部作が構想されるのはけだし偶然ではない。しかも『ピエレット』が、その三部作の第一に置かれている意味は、すでに冒頭のロマンチックな窓辺の邂逅の場面に象徴的に示されている。深夜、ピエレットを窓に呼びよせるのに、ブリゴーは何を歌ったか。ブルターニュの占謡、新妻を寿ぐ歌である。

僕らが来たのは、おめでとう、お伴せにと歌うため。

あなたの花婿、御亭主へ

もちろん花嫁、あなたにも。

これで絆は固まった、花嫁御寮、

こがね
黄金の絆だ、

死ななきゃ、切れぬ。

踊りに来ちゃ駄目、祭りも御法度。

あなたは留守番、

僕等が繰り出す。

わかっているかい、大事なことは、

御亭主大切、

吾身さながら惚れぬくことだ。

受け取ってくれ、手ずから捧げるこの花束、

身持ち正しく守ってみても

やがては萎れる花の身さ⁴⁵。

ここには、新妻を祝う気持にまじってそうした伴せな結婚を羨む独身者のやっかみ感情がのぞいている。そして、この古謡が歌われるにつれて、起き出す可憐の少女と、最後のリフレインで登場する醜悪、陰険な独身老嬢のシルヴィ、三部作『独身者達』の見事な開幕と言うべきであろう。

1979.9.12

註

1. Henri Godin, *De Pen-Hoël à Saint-Jacques* in *L'Année balzacienne* 1966, pp. 379-380.
2. Jean-Louis Tritten, "Introduction à *Pierrette*" in *La Comédie humaine*, tome IV. éd. de la Pléiade, 1976, p. 3.
3. Roger Pierrot, "notice à *Lettres à Mme Hanska*, tome I" éd. Delta, 1967, p. 633. 以下、バルザックのハンスカ夫人宛の手紙を引用する場合は、この édition を用い、発信の日付のみを示す。
4. à Mme. Hanska, le 2 novembre.
5. Balzac, *Pierrette* in *La Comédie humaine*, tome IV. éd. de la Pléiade, 1976, p. 159. 以下、バルザックの『人間喜劇』の作品の引用は、すべて新版プレイアド版による。
6. à Mme. Hanska, le 3 juin 1839.
7. à Mme. Hanska, (?) juillet 1839.
8. *ibid.*
9. J.L. Tritten, *op. cit.*, p. 7.
10. Pierre Citron, *Une source possible de "Pierrette"*, in *L'Année balzacienne* 1966, pp. 373-378.
11. Pierre Citron, "Introduction à *Pierrette*" in *La Comédie humaine*, tome III, éd. de Seuil, 1966, p. 7.
12. 拙稿『ウジェーイ・グランデ』献辞考』 *GALLIA*, No. 18, 1979, pp. 79-89.
13. たとえば、1839年3月16日に刊行された *Médecin de campagne* (5版), *Père Goriot* (3版)について、バルザックは、その年2月1日に、出版する本の献辞について指示をしている。

- (cf. à Gervais Charpentier, *Correspondances générales*, tom III, Classique Garnier) したがってほぼ校正・補訂から一、二ヶ月かかると見ることができる。
14. Eugénie Grandet in *La Comédie humaine* tome III, éd. de la Pléiade, 1976, p. 1053.
 15. *Pierrette*, p. 73.
 16. *Pierrette* p.74.
 17. *Eugénie Grandet*, p. 1072.
 18. *Pierrette*, p. 76.
 19. *Pierrette*, p. 76.
 20. *Eugénie Grandet*, p. 1071.
 21. *Pierrette*, p. 78.
 22. J.-L. Tritten, *op. cit.*, p. 7.
 23. Balzac, *La Lettre sur le procès de Peytel, notaire à Belley* in *Œuvres complètes* de Balzac tome 23, éd. Club de l'Honnête homme, 1971, この事件に関しては, Pierre-Antoine Perrod, *L'Affaire Peytel*, Hachette, 1958 が最も詳しいとされるが遺憾ながら入手できず, Balzac の『書翰』, 底本とした l'Honnête homme 版全集の Bardèche の解説のほか, J.L. Tritten, André Maurois, Roger Pierrot など, Perrod の成果をふまえた考証と, 中堂恒朗, 「『ペイテル事件』とバルザック」, 「季刊現代文学」第六号, 1972の論文に拠ることが多かった。
 24. à Mme. Hanska, le 30 octobre, 1839.
 25. J.-L.-Tritten, *op. cit.*, p. 9.
 26. *Pierrette*, p. 71.
 27. Balzac, *La Lettre sur le procès Peytel*, p. 657.
 28. *Pierrette*, pp. 71-72.
 29. *Pierrette*, p. 104.
 30. バルザックがスタンダールのこの小説を高く評価したことはよく知られている。あたかも、『パルムの僧院』は, この『ピエレット』に先立つ1839年3月に発刊されており, バルザックの評論『スタンダール論』*Etudes sur M. Beyle* にこの名作の賞讃をこめた批評が発表されたのは, 翌1840年9月25日である。
 31. *Pierrette*, p. 105.
 32. Balzac, *op. cit.*, p. 682-683.
 33. ペイテルは1804年生れ, 妻フェリシーは1828年生れで, 14才の差があった。
 34. à Mme Hanska, le 10 février 1840.
 35. Bardeche, "Notice à la Lettre sur le procès de Peytel, notaire à Belley" in *Œuvres complètes* de Balzac tome 23, Club de l'Honnête homme, 1971, p. 644.
 36. *Pierrette*, p. 136.
 37. バルザックはペイテルの印象を次のように伝えている。
「彼は, 多血質の男で, それも病的なまでに赤ら顔だったが, 元気旺んな, すぐに腹を立てる男である。気性も激しければ, 臂力も相当以上だったから, かっとなると, 手の方が先にでてしまう。高慢なところもあったが, むしろ見栄っぱりといった方がいいかもしれない。〔中略〕しかし, 根は善良な男である。」 Balzac, *op. cit.*, p. 652.
「結婚後日ならずしてペーテル新夫婦の不和が勃発した。喧嘩が連日のようにあった。フェリシーは教育なく, どちらかといえば愚かな女である。夫の気持を忖度して状況をできるだけ緩和しようという能力はない。むしろふてくされて薄笑いを浮かべている。もともと激しやすいペーテルは一層怒りをあふれさせるだけだった。」中堂恒朗, 前掲論文, p. 78.
 38. à Mme Hanska, le 30 août, 1839.
 39. Balzac, *Ursule Mirouët* in *La Comédie humaine* tome III, éd. Pléiade, 1976, p. 768.
 40. cf. Marie-Henriette Faillie, *La femme et le code civil dans la Comédie humaine d'Honoré de Balzac*, Didier, 1968, p. 31.

41. 拙稿『『ユルシュル・ミルウエ』の構造と意味』, 神戸女学院大学論集 No. 69, 1977, p. 59.
42. *Pierrette*, p. 92.
43. à Mme Hanska, le 16 août 1842.
44. 拙稿『ウジェニイ・グランデ献辞考』, *GALLIA*, No. 18, 1979, 参照。
45. *Pierrette*, p. 31.

原稿受理 1979年9月14日

Sources possibles de *Pierrette*

Takao Kashiwagi

Pierrette, la troisième des *Scènes de la vie de province*, n'a pas reçu, jusqu'à nos jours, l'honneur d'une critique nombreuse, ni d'une analyse soignée, malgré l'accueil unanimement favorable réservé à ce roman. Cet article a pour but de montrer quelques sources possible de cette œuvre, dans l'espoir que cette démarche nous permettra d'accéder au secret de la fertilité créative chez Balzac.

Remarquant le parallélisme frappant du début de *Monsieur Pierre*, roman feuilleton anonyme, avec celui de *Pierrette*, P. Citron suppose que l'arrivée de l'orpheline chez ses cousins tire son origine de *M. Pierre* publié juste deux ans avant. Mais si l'on met au valeur cette ressemblance apparente seulement dans la situation, n'est-il pas permis de signaler, avec au moins autant de raison, la similitude de l'arrivée de *Pierrette* avec celle de Charles dans *Eugénie Grandet* dont la cinquième édition vient de paraître au moment où Balzac caresse le projet d'un nouveau roman promis à Anna Hanska. Charles, lui aussi, est un orphelin recueilli par ses parrains.

Si *Pierrette* peut être considérée comme une sorte d'anti-thèse de Charles Grandet, pour quelle raison le récit, conçu à l'origine comme un mélodrame, s'est-il transformé en une histoire mélancolique et même sinistre ? Il faut se souvenir de la fameuse affaire Peytel pour laquelle Balzac, convaincu de l'innocence de l'accusé, a déployé tous ses efforts du mois d'août au mois d'octobre 1839, deux mois avant la publication de *Pierrette* ; Peytel, ancien ami du romancier, fut finalement exécuté, et certains critiques voient dans *Pierrette* la protestation ou la rancune de Balzac contre l'injustice du procès. A notre avis, les regrets n'ont pas été le seul motif qui ait poussé le romancier à modifier le projet primitif de son roman. La lecture de la *Lettre sur le procès Peytel* nous suggère des rapprochements essentiels concernant l'intrigue de *Pierrette*, et surtout la création de caractère unique de Vinet.

Cet avoué ambitieux et rusé n'aurait pas vu le jour si Balzac ne s'était pas tellement intéressé à ce que le tribunal et les gens de la ville ont dit sur Peytel pendant le procès. La jalousie malade de Sylvie pour *Pierrette* emprunte sûrement à celle de Peytel pour sa femme. Mais ce sur quoi Balzac voulait insister le plus, c'est sans aucun doute sur l'acte sublime de l'orpheline, quand Sylvie, poussée par la jalousie, a surpris *Pierrette*, elle n'a cependant jamais avoué le secret qui l'unit à son ami Brigaut. Ce comportement est tout à fait semblable à celle de Peytel, qui n'avoua jamais le véritable motif de son crime, de peur de mettre au jour la relation honteuse de sa femme avec son valet. L'acte de *Pierrette* illustre la compassion de Balzac pour ce malheureux notaire.